



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 8 月 27 日(水)

発行 館長 加 藤 智 一

鳥たちの「集会」

以前から、霞城セントラル周辺の立木や電柱では「ムクドリ」や「カラス」の皆さんが、朝な夕なにな大集合。ギャーギャーうるさいことこの上なく。おまけに糞爆弾も半端なく、通行人や管理している方々のご苦労たるや、想像を絶するものがあります。この、彼らの集会にはどんな意味があるのでしょうか。

「ムクドリ」や「カラス」が朝夕に木や電線に集まる行動は、専門的には「ねぐら入り（夕方）」と「ねぐら出（朝）」と呼ばれるものです。これは単なる休憩ではなく、彼らの生存戦略の一部なのです。「夕方のねぐら入り」の目的はというと、まずは「安全確保」です。集団で眠ることで、外敵（猛禽類など）から身を守る効果があります。また多くの目があれば、危険をいち早く察知できるというメリットがあります。さらに情報交換の意味もあり、どこに餌があったか、どこが危険だったかなど、個体間で情報が共有されている可能性があります。特に「ムクドリ」や「カラス」は知能が高く、社会的な学習が確認されています。また「社会的絆の形成」という観点から、群れの中で順位や関係性を確認し合う場でもあるようで、「カラス」は特定の仲間との絆を維持するために、定期的な接触を必要とすることが知られています。では、「朝のねぐら出」の目的はなんなのでしょうか。まず考えられるのは、「餌場への移動」です。夜を安全に過ごした後、餌場へと向かうために群れで飛び立ちます。ときには数百羽が一斉に飛び立つ壮観な光景が見られます。前日に得た餌場の情報をもとに、群れ全体が効率的に移動することができるというわけです。

だれが言ったか「カラス」は「空飛ぶ霊長類」だそうで、道具を使ったり、顔を識別したり、仲間と協力したりする高度な知能を持っています。「ムクドリ」も、都市環境に適応する柔軟性を持ち、群れの中で複雑なコミュニ



ケーションを行っています。電線や街路樹は、彼らにとって「人工の止まり木」。人間の生活圏にうまく入り込み、ねぐらとして利用しているのです。また



のねぐらには「選定基準」があるようで、風を防げる構造とか、外敵が近づきにくい高さとか、周囲の視界などが重要となっており、都市部では駅前の並木や公園が好まれるというわけです。

ところで、鳥のご先祖様は「恐竜」。となるとこれらの集団行動も「太古の記憶？」なののでしょうか。進化的には、羽毛を持つ獣脚類（例：ドロマエオサウルス類）から分岐したとされ、特に「カラス」や「ムクドリ」のような「スズメ目」は、恐竜の中でも高度な知能を持っていたグループの末裔だそうです。同じ場所から複数の個体の化石が見つかることや、複数の恐竜の足跡が同じ方向に並んでいる例があること、そして巣の跡や卵の配置から、彼らは群れで生活し、親が子を守り、集団で育てていた可能性もあります。また一部の恐竜（例：トロオドン類）は、脳のサイズが体に対して大きく、知能が高かったと推定されており、羽毛を持つ恐竜は、視覚や聴覚によるコミュニケーションが発達していた可能性もあり、現代の鳥のような「集会」的行動をしていたかもしれませんね。

「ムクドリ」や「カラス」が朝夕に集まるのは、単なる習慣ではなく、進化の過程で獲得した高度な社会性と生存戦略の表れといえるのではないのでしょうか。そしてその根底には、恐竜時代から続く「群れで生きる」という知恵が脈々と流れているように思います。彼らの「集会」を見上げるとき、私たちは太古の記憶と現代の都市が交差する瞬間に立ち会っているのかもしれません。しかし現代に生きる私たちにとっては、騒音と糞害に憤慨するばかりです。なんちゃって!!